

会報

第26号

平成26年(2014)1月15日

編集・発行
書学書道史学会
会報委員会〒166-8531 東京都杉並区
3-30-22 大学生協学会支援
センター内

TEL (03) 5307-1175

FAX (03) 5307-1196

第二十四回 書学書道史学会大会を終えて

横田 恭三

十一月九日・十日の二日間にわたり跡見学園女子大学の文京キャンパスにおいて、第二十四回書学書道史学会大会が開催され、一二〇名を超える参加者を得ることができました。この場をお借りして、ご参集くださった方々に対しまして厚く御礼申し上げます。



跡見学園女子大学・大会風景

本大会では、例年セットされている

総会・研究発表のほかに、講演会「文字統一と秦漢の史書」と特別鑑賞会「日中新発見の拓本・肉筆展」を開催いたしました。前者は、本年度から会員となられた大西克也氏(東京大学大学院教授)をお迎えし、最新の出土資料をもとに新知見を披露していただきました。ご講演の内容は、①文字統一の本質は用字法の統一であったこと。②その基準は史(書記官)が使用した規範的な隸書、即ち「史書」であったこと。③統一の記念として「泰」という字が「大」に代えて

使用されたこと。など、大変興味深いお話でした。当日の講演録を次号の研究誌に掲載する予定ですので、当日参加されなかった会員諸氏は、ご一読いただきたいと思います。後者の特別鑑賞会は、本学書道教室に有孔ボード運び込み、新出土の拓本(大東文化大学蔵「西林昭一元理事長寄贈拓」：当時、中国歴史博物館研究員であった史樹青氏が西林元理事長の為に記した跋文も含まれる)十一本、淑徳大学蔵十六本、個人蔵三本と未発表の手鑑「翰墨城」(個人蔵：MOA美術館所蔵品と同名)を展示したものです。大会第二日目には、小川博章氏(淑徳大学教授)と高城弘一氏(大東文化大学教授)より、中国の拓本と日本の手鑑について、それぞれ約二〇分ずつ解説していただきました。全員マスクを着用、ガラスケースなしで直に参観していただいたため、新たな発見や感動があったことと思われます。

さて、研究発表は第一日目に二本、第二日目に六本、計八本が執り行われました。内容は、墓誌に関するもの一本、書論に関するもの一本、空海の書に関するもの二本、仮名に関するもの三本、印章に関するもの一本でした。都心での開催としては発表数がやや少ない印象ですが、発表後の質疑応答はいずれも熱の入ったものとなりました。なお、研究発表の詳細については、事前に送付された大会レジュメに掲載されていますので、そちらをご覧ください。

昨年度の別府大会は、荒金大琳氏のご尽力によって大変な「お・も・て・な・し」を受けました。一方、本学は専任教員ひとり、かつ院生もいないという状況のため、発想を逆転させ、「できるだけシンプルに」を目指しました。これは、今後、同様な環境の大学が比較的安心して引き受けられるようにということも念頭に置いたからです。とはいっても、ささいなことにも本学の書道部員が土曜日第三限まで授業があるにもかかわらず、前日の展示から日曜日の後片付けまで総力を挙げて手伝ってくれました。また、幹事役員の強力なバックアップがあったことも忘れてはなりません。皆様に支えられて何とか無事に終えることができました。ご尽力いただいた皆様に改めて心から御礼申し上げます。

(第24回大会運営委員長)

第9回 学生・若手の会員による研究発表会報告

国内局

去る6月23日(日)、大阪教育大学天王寺キャンパス西館において、「第9回学生・若手の会員による研究発表会」が開催された。

根来孝明氏(フートルダム女学院中学高等学校非常勤講師)による「良寛の書法とその評価について」の意欲的な発表と、「若手研究者の研究紹介」として、尾川明穂氏(安田女子大学助教)による「董其昌書論に着目してきて」という研究報告が行われた。研究報告では、研究着手の段階も含めた丁寧な報告をきくことができ、これから研究をはじめめる学生にとっても益するところが多かった。



大阪教育大学・発表会風景

後半の意見交換会では、「あなた(私)にとっての書の魅力」と題して、書き手の立場、見る立場、教える立場、いろいろな立場から書の魅力を探り、これからの書芸術・書教育を考える意見交換の場となり、それらを共有できたことは、大きな成果であった。今回の会場が関西圏ということもあり、参加者は役員含めて27名と

やや少なめであったが、全体としてなかなか雰囲気の中で進められた。

「次回「研究発表会」についてのお知らせ」

例年6月下旬に実施される「学生・若手の会員による研究発表会」について、平成26年度は、9月に開催が予定されている本大会(於花園大学)と比較的接近しているため、休止と致します。大学院生、または若手で発表を検討中の会員の方々は、ぜひ本大会での発表にエントリーしてください。大会発表者へのエントリーに関しては、次号会報及びホームページに募集案内を掲載いたしますので、ご確認下さい。

第10回 会員のための鑑賞セミナー報告

国内局



畠山記念館・鑑賞セミナー風景

平成25年11月30日(土)10時半より、東京・畠山記念館において、会員のための鑑賞セミナーを実施した。

今回で10回目となる鑑賞会は、同館が7年ぶりに書をテーマにした企画展「書之美」

和歌のころ・禅のころ(会期10月5日〜12月15日)に合わせて開催したものである。学会本大会での緊急告知となり参加者数が心配されたが、国宝「離洛帖 藤原佐理筆」が特別展示中とあつて、定員を上回る26名が詰めかけた。

参加者は、各自展示室にて日中の墨跡や平安・鎌倉の古筆の名品を堪能し、季節の茶器の取り合わせとともに茶の湯の書を鑑賞するという貴重な機会を得た後、同館講堂にて本学会員3名による特別解説を聴講した。

まず、同館学芸課長の水田至摩子氏より、同館の歴史およびコレクションの概要と同館ならではの鑑賞のポイントについて解説があった。つづい

て、同館学芸員の柳田さやか氏は、「藤原佐理筆「離洛帖」について」と題して、作品の基本情報と伝来事情に関する報告を行った。そして、最後に帝京大学専任講師の福井淳哉氏は、「藤原佐理と平安時代の書―三跡と和様書道の確立―」と題して、藤原佐理の筆跡と日中の遺品との共通点を指摘しながら佐理の書を紹介した。

今回は午前の開催とあつて、セミナーの前後に自由に見学の時間をもてたことで、参加者各自が納得いくまで作品鑑賞することができたのではないかと思われる。特別解説では、展覧会や離洛帖に関連する話題が提供され、節目となる10回目を飾るにふさわしい内容であった。

活動報告

国際局

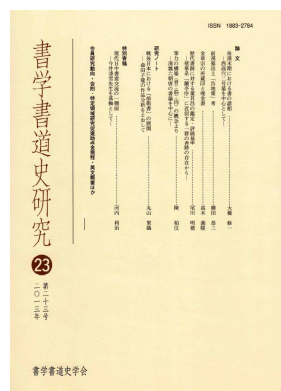
国際局からは、一つだけ関連事業という形の活動報告をさせていただきます。それは、『会報』第25号ならびにホームページに紹介いたしました「講演会について」です。

大東文化大学書道学会が台湾大学芸術研究所教授・傅申先生を招聘し、平成25年7月13日(土)午後、ご講演「日本残巻本より(故宮本自叙帖)が北宋影写本であることの確認」をいただきました。おかげさまで学内外より三百人以上の聴講を賜り、盛況でありましたことを報告いたします。

活動報告

編集局

本年度も、編集局の主たる任務は、学会誌『書学書道史研究』の編集でしたが、例年通り中村、



鍋島、下田が中心となつて作業にあたり、査読に当たられた先生方をはじめ、関係諸氏の協力を得て、第23号を刊行することが出来ました。印刷・製本業務については、前号から新たに株式会社報光社に委託することになりましたが、今号においても同社に業務を委託した結果、今年度予算の報告にもある通り、予算面でもほぼ昨年同様の結果となりました。

第23号については、すでに訂正すべき誤植箇所指摘を読者からいただいておりますが、誤植に限らず、ご意見等がございましたら、中村宛メール(アドレスは学会誌奥付の「編集局からお願い」の欄に記載)にてお知らせいただければ幸いです。編集局の仕事全体に関するご要望でも結構ですので、メールにてご連絡願います。

なお、次年度の第24号への投稿締め切りは平成26年3月末日です。投稿予定者は、学会ホームページ掲載の「投稿規定」を熟読の上、規定に則って投稿してください。

活動報告

学術局

J-STAGE

昨秋刊行されました学会誌『書学書道史研究』23号について、前号同様、半年後の本年4月中旬にJ-STAGE(ジェイ・ステージ)に đăng載できるよう、努めています。なお公開時には、学会ホームページでお知らせいたします。



※22号以前はすでにご覧になれます。

『東洋学・アジア研究連絡協議会について』

書学書道史学会など三十四の正会員学協会とオプザーバーの三学会から成る右記協議会の平成25年度総会が、12月14日(土)に東京大学法文二号館で開催され、シンポジウム「東洋学・アジア

研究の新たな振興をめざして」(本学会ホームページで既報)も開催されました。

活動報告

研究局

平成25年度特定領域研究促進助成金制度の応募件数は一件でしたが、審査の結果、採択が見送られました。平成24年度の採択者の計画は順調に遂行され、規程にしたがつて、11月10日(日)の大会で口頭報告が行われました。

同制度の現行応募計画書様式について、記述スペースを縮小するなど応募しやすくする簡素化の方針を常任理事会で諮り、11月9日(土)の理事会で承認されました。具体的な様式についてはなお検討中ですが、平成27年度募集から様式を簡略化いたします。

なお、平成26年度の応募期間は平成26年6月1日(日)から6月3日(火)で、応募計画書のダウンロード期間は、平成26年4月1日(火)から5月末日です。学生会員の応募も可能ですので、ふるって応募してください。

追悼

鶴田一雄先生とお別れ

角田 勝久

恩師鶴田一雄先生は、去る九月十九日午後一時四十二分に新潟市内の病院で、他界されました。亡くなられる三週間前に体調不良で急遽入院されましたが、一時回復されて「すぐ退院して頑張るよ」と仰っていました。

しかし、その言葉も空しく、容態が急変し、あつという間に旅立たれました。関係者一同、本当に驚きました。病名は癌であるとのことでしたが、入院されるまで一切自覚症状はなかったとお聞きしています。先生、享年六十一歳、極めて早すぎる旅立ちとなりました。

先生は西林昭一先生のご門下として永く研鑽を積み、中国書道史および書論の研究を専門領域とされてきました。本学会の理事を永年務めるなど、その力量を『書学書道史研究』をはじめとする学術誌等に、いかなく発揮してこられました。



在りし日の鶴田一雄先生(於北京)

また、作品制作の面でも毎日書道展や東京書道会展のほか、毎年一月初旬には東京の八重洲画廊での俵清社展へ作品を発表されてこられました。こうしたことから、先生は、研究と制作の両面から書を追求

されていたことがよくわかります。

先生は、もともと新潟の方ではなく、長崎県佐世保市がご出身でした。大東文化大学の大学院を修了後、埼玉県内の県立高校に教諭として奉職されて、昭和六十年に新潟大学に着任されました。なにより温厚で面倒見のよい性格から、ほどなく本学へ溶けこまれていかれたことは想像に難くありません。このようなお人柄により、大学付属幼稚園の園長や、教育学部の副学部長という重要なポジションに職員の圧倒的な支持のもと、ご選出されたのであろうと得心いたしております。

偉ぶつたところが一切ない先生でしたから、当然のことながら学生たちとの距離も、極めて近いところにおられました。時々、学生たちと連れ立ち、展覧会に出かける先生のお姿が、今も目に浮かびます。また、酔いにまかせた学生が、突然、先生のご自宅へ押しかけたという話も仄聞しております。先生はこうした学生たちとの交流を本心に心から楽しんでおられていたようです。

一方、ちよつと休みがちな学生には、先生が直接にお声をかけられ、研究室でよく話に耳を傾けておられました。こうした先生のきめ細やかなご指導の賜により、救われた学生もかなり多くいたかと思われまふ。

先日、四十九日の法要が行われ、ご自宅へお伺いさせていただきました。ご霊前で「これからは本気で頑張るなさい」と、先生から最後のご指導をいただくような気がしました。今の私には先生のご意志を胸に受けとめ、精進するより残された道はないのだと、改めて思い至りました。鶴田一雄先生、これまで本当にありがとうございました。どうか安らかにやすみください。

日本書論はいつから〈秘伝書〉になったのか

永由 徳夫

私の関心事の一つに、「日本書論は〈秘伝書〉か」というものがある。確かに辞典類を繙くと、『夜鶴庭訓抄』『才葉抄』『入木抄』等に対しては、概ね「書式故実を述べ、家の書を論ずるに止まる秘事相伝の書」といった捉え方が通行している。だが、中古・中世の日本人が説くところの「カクスコト」「秘説」といった謂いと、現代に生きる私たちが「秘伝」の語に懐く漠然としたイメージとは、少しく差異があるのではなからうか。

現代の感覚をそのまま往時に当てはめることは、些か危うい。たとえば、何故かの有名な『風姿花伝』をはじめ、〈秘伝書〉の多くは、今日に至るまで伝存しているのか。それは、「秘」すること、少し言葉を加えるならば、「秘」する形を取ることが、実は結果として後世に伝え遺す最大最良の方法であったからである。「秘するところの美」は、日本古来の特性として、脈々と受け継がれてきた美意識といつてよい。かかる日本人の思想性・精神性は、その時代時代の要請の中で誕生し、より深く醸成されていったのであろう。そして、伝え遺すということに関しては、保存のための機器に恵まれている今日の私たちよりも、往時の日本人の方が、より強い飢餓感を持っていたに違いない。多くの古筆切に接するたび、どうしても歌の途中で裁断するのか、せめて和歌一首、区切りの良い所で……とついそう思ってしまう。しかし、已むに已まれぬ事情の中で、それが仮に本意でないとしても、是が非でも己が掌中の珠として、大切に後々まで伝存したいという気持ちの方が勝つたのではあるまいか。

閑話休題、中古から近世に亘る長き歲月において、日本書論は故実・作法を述べた〈秘伝書〉である、と一括りにしてしまつては、その時々書芸術観の本質を捉えることは難しい。少なくとも中古・中世の主要書論

は、当時の社会と文化の大きなうねりの中で成立した、謂わば「書の古典籍」である。この延長上に近世書論は存在するが、ここでキーワードとなるのは「入木道」である。「入木」の語は、王羲之の「入木三分」の故事に基づき、筆力が沈着勁健な様をいうことは夙に知られているが、日本では、手習い、書道の意として多く用いられた。古くは『本朝文粹』『台記』等に見え、『才葉抄』『入木抄』では、書道の異称として「入木道」が用いられる。それが、江戸時代に入り、たとえば持明院流当主が自流関連の書名に、『入木道秘伝』『入木道相伝事』のように「入木道」を冠するようになると、書道の単なる異称ではなく、「秘伝」としての書式故実を重んじる流儀書道」という限定した意味合いに変容していく。

では何故、日本書論全般が〈秘伝書〉として捉えられるようになったのか。その大きな要因の一つとして、江戸時代の唐様の隆盛ならびに中国書論の受容が挙げられる。近世書論は、流儀書道を標榜した和様書論と中国書論の摂取に努めた唐様書論とに大別されるが、唐様書論が『説文解字』を筆頭に、『書断』『書譜』『東坡題跋』『山谷題跋』等を頻繁に引用して談論風発の様を呈したことは、縷々継承されてきた「書流」



『才葉抄』が口伝されたという高野山(金剛峯寺正門)

の存続に危機感をもたらしたと推測される。時にいつそう「流儀書道」を標榜することとなり、和様書論の硬直化・形式化を招いた。そのことが、私たちの「日本書論観」に想像以上に大きな影を落としているのではあるまいか。今後、周辺の学問領域も含めて精査することで、「日本書論は〈秘伝書〉である」という従来の固着化した捉え方は修正されていく可能性が残されているのではなからうかと、熟々思いをめぐらすのである。

平成24年度 会計決算報告書		
	項 目	決 算 額
収入の部	個人会員会費	3,289,000
	団体賛助会費	450,000
	その他の収入	268,130
	前年度繰越金	4,572,097
	合 計	8,579,227
支出の部	編集局経費	546,525
	国際局経費	10,000
	国内局経費	282,000
	学術局経費	2,315
	研究局経費	10,000
	《会報》編集委経費	0
	ホームページ委経費	0
	事務局経費	
	謝金手当	0
	会議費	86,280
	荷造送料	307,228
	遠隔地交通費	214,640
	普及広報費	0
	印刷費	0
	通信費	3,270
	事務消耗品費	1,795
	事務委託費	759,781
	人件費	0
	諸学会費	0
	選管費	0
	予備費／繰越金	6,175,393
	合 計	8,579,227

平成25年度 会計予算報告書		
	項 目	予 算 額
収入の部	個人会員会費	3,000,000
	団体賛助会費	100,000
	その他の収入	300,000
	前年度繰越金	6,175,393
	合 計	9,575,393
支出の部	編集局経費	600,000
	国際局経費	300,000
	国内局経費	600,000
	学術局経費	200,000
	研究局経費	500,000
	《会報》編集委経費	200,000
	ホームページ委経費	200,000
	事務局経費	
	謝金手当	200,000
	会議費	300,000
	荷造送料	400,000
	遠隔地交通費	400,000
	普及広報費	100,000
	印刷費	200,000
	通信費	10,000
	事務消耗品費	10,000
	事務委託費	700,000
	人件費	100,000
	諸学会費	10,000
	選管費	300,000
	予備費／繰越金	4,245,393
	合 計	9,575,393

平成25年11月9・10両日、跡見学園女子大学・文京キャンパス2号館4階M2409教室で開催された「第24回大会」の初日冒頭、例年通り本年度総会が開催された。

総会は、大野修作理事の司会で、まず澤田雅弘副理事長による開催の辞、小仲信孝跡見学園女子大学文学部長による開催大学代表挨拶、大橋修一理事長の挨拶に続き、荒金信治諮問委員を議長に選出して議事に入り、以下の議事及び報告がなされた。なお、議事については、いずれも満場一致で可決された。

〈議事〉

- ▽平成24年決算事業報告案(鈴木事務局長)
- ▽平成24年決算監査報告(名見耶監事)
- ▽平成25年予算事業計画案(鈴木事務局長)

〈報告〉

- ▽編集局報告(中村編集局長)
- ▽学術局報告(森岡学術局長)
- ▽国際局報告(大橋理事長・代理)
- ▽国内局報告(横田国内局長)
- ▽研究局報告(澤田研究局長)
- ▽会報委員会報告(高城会報委員長)

〈連絡〉

- ▽大会日程等説明(横田開催運営委員長)
- ▽事務連絡(鈴木事務局長)

【第13期役員選出選挙について】

本学会の現第12期役員会(理事・監事)は、平成26年3月31日をもって任期(2年)満了となることから、新たに第13期役員選出のために選挙を実施します。

詳細については、同封別紙(「役員改選選挙の告示と投票」について)に記載のとおりです。会員各位におかれましては、本学会創設以来、守り続けている民主的運営の美風を堅持するためにも、すべての会員による投票をお願いします。

なお、選挙管理委員会については、第12期役員会発足時、すでに理事会で承認された、以下に記載の委員会メンバーによって構成、及び実施されることと決定しています。

〈選挙管理委員会〉

委員長…杉浦妙子
委員…柿木原くみ
委員…鈴木晴彦
委員…高城弘一
委員…亀田絵理香
委員…山本まり子

【選挙名簿について】

第13期役員選出選挙にあたり、「選挙名簿」を作成します。本名簿に登録される方は、平成26年4月1日現在、満68歳未満の会員です。(「選挙管理規程」第3条による)

ただし、当選後の資格審査の関係上、平成23年度より会費滞納(住所不明含む)の方は、上記年齢に達していない場合であっても、本名簿には登録されていません。

なお、これまで選挙の実施年度毎に『会員名簿』が発行されてきましたが、個人情報保護の観点からこれを廃止し、今回は「選挙名簿」(満68歳未満の会員氏名と所属のみを記載)を発行することにしました。従前どおりの『会員名簿』発行に関しては、新理事会での検討議題とします。

【平成26年度大会開催時期変更のお知らせ】

すでに昨年11月の大会での総会で告知したとおり、本年度の大会が9月開催となり、大幅な変更となります。会員各位にあつては、くれぐれもご承知おき下さいますようお願いします。

これに関連する「お知らせ」が、本会報2頁の国内局欄にも掲載されています。合わせてご覧下さい。

【学生会員から一般会員への手続について】

学会では、学生会員の「有期会員制」を導入しています。この制度は、学生会員(学生会費適用の方)が大学院を修了、もしくは満期退学・自主退学、その他の理由により学籍を失った(学割証の発給対象でなくなつた)時点で、学生会員資格を、一旦終了とするものです。該当の方が引き続き本学会会員に留まろうとする場合、以下の会員変更手続きが必要となります。

会員変更手続きの用紙が、学会ホームページにアップしてあります。ホームページ右の「入会申込書」を選択し、「会員変更申込書」をダウンロードして、必要事項を記入の上、学会事務局へ送付して下さい。

また、当該会員手続きは、届け出制度となつてゐるため、理事会での資格審査はありません。したがつて、書類提出のみで学生会員資格の終了時点から自動的に一般会員資格が付与されます。今春に学生会員資格を失う方は、早めに手続きをお願いします。送付先は左記のとおりです。

〈事務局の連絡先〉

〒166-8532
東京都杉並区和田3-30-22

大学生協学会支援センター内

書道史学会事務局

☎ 03(5307)1175

FAX 03(5307)1196

メールアドレス shogaku@univcoop.or.jp

※電話での応答は「大学生協学会支援センター」となります。

支援センター内の学会担当者…井手富士雄

新入会員紹介

(学生会員)

久住 真之 筑波大学大学院生

正岡 知晃 筑波大学大学院生

※平成25年5月〜同年11月に申請された方

事務局

談話 中

海外との交流

丸山 果織

十月、長い空の旅を経て、ドイツのハイデルベルクという街に着いた。この街は京都に似ている。低く緩やかな山の端。古の香りを残す古城と石畳。これらを背景に、ドイツで最も古いハイデルベルク大学が建つ。同大の客員研究員として渡独し、笠嶋忠幸先生(出光美術館)のご講義と調査のお手伝いと、自身の調査を行った。この大学では、日本の書を研究する学生たちと出会った。その中に、以前日本で私を訪ねてくれた学生さんの姿もあり、嬉しい再会を果たした。そして、刺激的な友人となった。遠い空の向こうの仲間の存在に心強く思う。何よりも海外の人たちが日本の書に関心をもってくれていることは、とても嬉しい。かつて、新しい書を求めた戦後の前衛書家たちも、海外の前衛芸術家たちと交流し、勇気をもらっていたのであろう。

文墨作品の息づく町

松尾 大輔

今夏、休暇を利用して長野善光寺近くの清水屋旅館に宿泊した。ある作品を見ることが目的だ。長野市大門町の清水屋

旅館は善光寺から南に真つ直ぐのびた中央通り沿いにある。一六〇年以上の歴史のある老舗だ。二世中村蘭臺(一八九二～一九六九)の作品が飾つてある客室がある。二世蘭臺は大正十二年(一九二三)九月一日の関東大震災により、約二年間長野に移住している。蘭臺三十一歳の頃である。その頃制作された作品群は今も長野市の善光寺周辺に多く見ることができ、刻字の扁額は当時、多くの注文に応えた若き蘭臺の情熱を残し、今も精彩を放っていた。町を徘徊し、二泊の休暇は終わった。

長野善光寺周辺には文墨の文化土壌があり、歴史があり、今なお多くの作品が眠っている。

社会人を経ての博士後期課程

川内 佑毅

二〇一三年四月に大東文化大学大学院書道学専攻博士後期課程に入学した。修士論文を執筆した際、自身の研究力の無さを痛感し一旦はその道を離れたが、社会人となつて会社員を経て、書道講師や教室を開いて生活する中で、研究に対する思いが悶々と心中で燦つていた。研究を進めるのに最も重要なものは研究題目、資金、時間、そしてそれを形にできる環境

などであらう。ある日、自分がそれらの条件を満たす事のできる立場にいることに気づき、進学を決意した。

社会人になると、時間が貴重であることを痛感する。そして、その時間を自己実現に使えることは誠に贅沢である。「夢は時間を裏切らない、時間も夢を裏切らない」。解釈は人々だが、私は自分の思い描く研究の実現に向けて時間を費やす中で、勵志の言葉として胸に置いている。

拓本会に参加して

田村 南海子

大学に入学してから、掃苔をライフワークとされる方々と知り合う機会を得ました。一緒に参加させて頂いた折には、博物館や美術館、図書館だけではなく、道端や墓地にも近世書道資料が多く存在することを教えられ、感銘を受けたものです。最近では自分でもまねるようになり、技術の向上を目指して経験を重ねております。

しかし、碑は風雨に晒されている場合も多いため、保存状況が芳しくないのも事実です。戦火や震災を乗り越えてきたものの、今にも崩れ落ちそうな碑を見ると、初心者ながらにこの作業を継続して行う必要があると痛感させられました。拓本を

取り、データベースを構築する活動は、書道的な観点からも重要な役割を持つものです。今後も積極的に携わって行きたいと願う次第です。

編集集 後記

◆毎号、若手会員を中心に談話室の原稿を執筆していただいております。本号でも四名の方にご快諾いただき、誠に感謝しております。次号以降も、お声掛けの際は何とぞ宜しくお願い致します。(六人部)

◆今号で会報委員としてひとまずの役目を終えます。毎回形になるとホツとしますが無事に発行できるのも皆様のお力添えあつてのこと、深謝申し上げます。(金子)

◆今日、手鑑は、加速度的に崩される(解体される)のが現状である。業者に渡った手鑑は、切を一枚ごとに台紙からはがし、または台紙ごと切り刻み、それぞれ値段をつけて販売するのである。購入する方も、手鑑まるごと一帖だと値段はかさむし、必ずしも欲しくない切も含まれるので、この崩しは歓迎されるところ。しかし、手鑑内の切の配列や所収状況はわからなくななり、伝来した手鑑そのものの重みが逸してしまうのは残念でならない。秋季大会において開陳された、前田家伝来の手鑑『はまちどり』は、当初の姿を残し、貴重な文化財ではないかと思う。(高城)